

こころの発達における「二」の成立

Formation of "Two" in psychological development

藤巻 り*
FUJIMAKI Ruri

はじめに

こころの発達を考える際に、自我、認知機能、社会性など、さまざまな領域の発達が注目されるが、そもそもそれらの前提となる「二」の構造が成立しているかどうかという視点がある。「自/他」や「主体/客体」など、「二」の構造があってはじめて自分という感覚を持ち、物事を認識し、他者と関わることができるからだ。田中 (2013, 2017) によれば、このような心理学的な体験の基部構造となる「二」が、自閉症スペクトラム障害 (以下ASD) においては成立していないという。こころにおける「二」の構造の成立過程を知ることは、ASDを心理学的な側面から理解し、心理療法的なアプローチの可否や方向性を考える上で重要な示唆を与えてくれるだろう。

これまでにも、さまざまな発達論の中に、こころにおける「二」の成立への言及は散見するが、それぞれ異なる文脈の中での議論にとどまり、包括的に論じられてはいない。本論は、こころにおける「二」の成立を発達論的に論じている心理学を概観し、ASDの心理療法を「二」の成立過程として論じる素地を作ることを目的とする。

1. Wallonの心理学

(1) PiagetとWallonの論争

まずは100年近く前にPiagetとWallonのあいだで繰り広げられた議論と、そこから浮き彫りにされるWallonの心理学を概観するところから出発したい。Piaget (1896-1980) とWallon (1897-1962) は、同時代のフランスの心理学者である。両者の発達観は大きく異なり、二人の間に30年以上に渡ってくり広げられた議論は「ピアジェーワロン論争」として知られている (加藤ら, 1996)。WallonがPiagetを批判した点は、主に二つある。ひとつはPiagetが子どもをはじめから一個の主体として扱い、主体が発生する契機を扱っていないこと、もうひとつはPiagetが表象 (心的なもの) の発生においても発達の質的飛躍を想定していないことである。「主体」と「表象」の発生はどちらもこころにおける「二」のあらわれであると考えれば、これは「二」をめぐる論争といえるだろう。

加藤 (1996) や浜田 (1983) は次のような表現で、Piagetが「二」を前提とした心理学であり、Wallonが「二」以前の状態を想定し、「二」の分化生成過程をこころの発達の中心に据えていることに言及している。

* 埼玉工業大学人間社会学部心理学科

「ピアジェは相互に切れた主体と客体から出発し、主体の同化的機能を軸に主体と客体の相互作用の発展を記述しようとしたのに対し、ワロンは、主体と客体の区別が発達の出发点においては、1つの抽象でしかないことを押さえて、その上で両者の分化、距離化の過程を問題にしている（…）子ども独自の閉じたシステムが関係の中からどのように切り出されてくるかを問題にしているように思われる。（傍点引用者）」（加藤, 1996）

「子どもを単にひとつの個体として見定めて、そのなかに自我意識がどう目覚めていくかを見るのではなく、子どもが、まさに他者との関係のなかで他者との境を見出し、個体になっていく過程を追う（…）私たち大人にはきわめて自明のものと思われる“人間は個体である”という前提を発達論的に還元したうえで、個体意識の成立と、そこにおける他者との関係性を見つめる…こうしたワロンの視点に導かれたとき、私たちはそこに発達心理学への新しい展望を得るはずです。（傍点著者）」（浜田, 1983）

そもそもPiagetとWallonの論争の発端となったのは、Piagetの「自己中心的思考」という概念であった。Piaget (1928/1996) によれば、自己中心的思考とは、「自己 (égo) と他者 (l'autre) の区別が欠如」した状態であり、そのために「子どもは自分の視点と他者の視点を混同」している。これは一見、主体と客体が一体となった「二」以前の段階を指しているようでもあるが、実はそうではない。Piagetは、子どもが「すべてを自分に帰着させる（傍点引用者）」ゆえに一体だと説明しているからである。Piagetは主客の区別自体がない状態を想定しているのではなく、子どもが区別を自覚していないために混同が生じると考えたのである。自己中心的思考という名前の通り、これは「世界を自己に同化（傍点引用者）」しているという意味である。自己中心的思考は子どもの思考が社会化されていないために起こる現象であり、子どもは社会性を獲得することによってこの段階を越えるとPiagetは考える。

Wallonはこれに対して正反対の見解を示す。Wallon (1928/1996) は、Piagetが「自己中心的思考」と呼んだ事態を、「主体自体と主体の知覚する事物との本質的な混淆（傍点引用者）」であり、この自他混淆の状態こそが人間の社会性の源泉であると考えているのだ。両者が捉えている子どもの自他混淆の状況像は変わらない。しかし両者の「個」や「社会」という概念が全く異なるため、そこに見える現象は正反対のものとなるのである。

Piaget (1951/1996) にとって、社会（対人的環境）と物理的環境は、本質的に差異がない。「赤ん坊を取り巻く大人たちは、おそらく、とくに活動的な物体として、（…）自分自身の身体と驚くほどよく似た表現をする物体として知覚されているにすぎない（傍点引用者）」という表現に端的に表れているように、Piagetから見れば、子どもの周りの大人たちは赤ん坊の外側にある物体にすぎない。さらに、個体の自己認識すら「自分の身体とそれにくっついている自己 (moi)」、つまり物理的な身体とその付属物としての自我意識 (moi) に分かれているという。「子どもの精神発達というものは、どの水準においても物理的な世界への個人の適応であると同時に個人の社会化である（傍点引用者）」というように、Piagetにとって「社会性」とは、もともとは独立した形で存在している個体が世界とつながることなのである。

一方Wallonにとっての「社会性」とは、すでに個として成立している人と人をつなぐような発

達の成果としてあらわれてくる高度なものだけを指すのではなく、原初的なつながりを含んでいる。それは人間の赤ん坊が無力で周りの大人に依存しないと生きていくことができないということ、人間が生まれ落ちて来るのが大自然ではなく人々の暮らす社会の中であるという事実¹に由来する。Wallon (1947/1996) は、「子どもに最初に役立つ関係は、物理的世界との関係ではない。(…) 子どもに最初に役立つ関係は、人間との関係、理解の関係である」と言い切る。確かに、人間の赤ん坊はシマウマのようにすぐに自力で立ったり歩いたり、自分で食物を噛んで呑み込んだりできるわけではない。赤ん坊にとって、環境とは、まず自分を世話してくれる社会を意味する。そこで必要となるのは人との関係なのである。ここでWallonが重視するのが情動である。情動は、生理的な現象を引き起こすという意味で個人内部に向かうものであると同時に、人と人との間で伝染するという外に向かう性質を持つため、「分節言語に先行する表現システム」として機能する。「情動によって、個人は自分自身に属する以前にその環境に属している」とWallonは考える。このような子どものあり方を、Wallonは「全面的に社会に向けて方向づけられた存在」であるという。Wallonにとっての社会性とは、「二」以前の自他癒合の状態から始まる幅広い概念であり、個の成立を前提としたものではなく、むしろ個が成立する条件そのものである。Wallonに言わせれば、自我(主体)こそが「意識に最初から備わっているものではなく、ひとつの獲得、ひとつの征服」なのである。

(2) Wallonにおける主体の成立過程

それではWallonにとって、主体はどのように成立するのだろうか。ここでは主に2つの論文(Wallon, 1946, 1956)をもとにして、Wallonにおける主体の成立過程を素描してみよう。

子どもの心的世界は、初めは外的状況と子ども自身に属するものとが入り混じった「混淆的な体感」(Wallon, 1956/1983)からはじまる。そこに周囲の人とのやり取りを通して「二」が生じるが、ここで注意すべきは、子どもの世界にいきなり主体と向き合う他者があらわれるわけではない、という点である。他者は、まずは子どもの心的世界に二極性をもたらす「第二の項」を担う者として登場する。子どもは実在の他者とのやり取りを通して、すること/されること、する者/される者など、物事の「二重性」や「二つの項」を体験する。世界は「二」に分割されつつあるが、そこにはまだ自他という内容的な差異はなく、両者は交替可能な匿名的な「二」なのである。

生後数カ月から1, 2歳台にかけて、子どもは他者とのやり取りを通じて、この「二」を洗練させていく。ここでWallonが特に注目するのは、「交替やり取り遊び」である。隠れたりみつめたり、追いかけてたり追いかけられたり、叩いたり叩かれたり、といった遊びに子どもは熱中する。そこには勝ち負けのようなルールはなく、互いが役割を自在に交替しながらやり取りの機微を楽しむ遊びである。「言いたければ、二人の個人がいると言うこともできましようが、この二人はまったく同質で、交換可能な二人でしかありません(傍点引用者)」(Wallon, 1946/1983) というように、これは二者であると同時に二者以前でもあるような、匿名的な二人の間に起きている現象である。Wallonはこれを融即(participation)と呼ぶ。融即とはすべてが未分化に入り交じる混淆とは異なり、「ふたつの中心を持った意識」(Wallon, 1956/1983)、つまり「二」に分かれた上で、相互浸透する状態を指している。

やり取りを通して「二」が確かなものになってきてから、二つの項の片方に執着する自己主張の時期があらわれる。ここで自分でないものを排斥し、3歳頃には自分のことを「私(moi)」と言えるよう

になる。同時期に、他者も固有の特性を持った他者として認識されるようになる。こうして自我と他者は分離することで同時に成立する。

以上のように、Wallonにおける主体の成立はまさに「二」の実現である。他者との実際のやり取りを通して、子どもは自らの内側に「二」の構造を獲得するのである。

(3) Wallonにおける表象（心的なもの）の発生

WallonがPiagetの表象論を批判したのは、Piagetが、シニフィエでしかない運動的知能と、シニフィアンである表象という全く異質のものを連続的につなげて説明し、両者の決定的分化を扱っていないという点である（加藤, 1996）。これは、Wallonが表象の発生においても「二」以前の状態、つまり意味するもの（シニフィアン）と意味されるもの（シニフィエ）が混在している状態や、その分化過程を想定しているということである。

Wallonは人の筋肉運動について考える時、外的世界に対して実際に働きかける運動機能だけでなく、直接外には働きかけない内的な筋肉の動きである姿勢（attitude）に注目する。姿勢は情動とも深く結びついている。姿勢・情動機能はWallonの表象論に大きく関わるが、その関わり方について、浜田（1994）は「自他交感」、つまり結合の契機を、加藤（2015）は「主体と対象の距離化」、つまり分離の契機を指摘しているのが興味深い。

まずは浜田（1994）の自他交感としての姿勢・情動機能についてみてみよう。新生児の泣き声や表情などの表出行動は、意図したものではなく生理的な反応によるものである。しかし泣きという情動は自己を塑型して外に表出される姿勢（attitude）となって、周りの大人の情動を揺さぶる。不憫に思っ思わず抱いてあやしたくなる場合にはもちろんのこと、イライラしてその場から逃げ出したくなる場合も含めて、赤ん坊の泣きは何らかの情動を相手に引き起こすのだ。人は身体を持つことによって物理的には個として外界から隔てられているが、同時に、身体を持つことによって情動的に他者とつながっている。Wallonに触発されたMerleau-Pontyが、のちに提唱した間身体性という概念は、人が身体を介して現象学的につながっていることを端的に示したものだだろう。

このように人と人とのコミュニケーションは、意味の伝達に先立ち、身体を通じた情動的な共鳴として始まる。主体の成立に関しても、あいだに匿名的な「二」もしくは動きとしての「二」の段階があったように、表象の成立に関しても、意味以前のやり取りそのものを楽しむ段階や、情動がそのまま身体を通して共鳴するような原初的な「二」の段階が重要である。浜田（1994）が指摘するように、Wallonが想定していた原初の心的世界は、自他未分化という消極的な意味合いではなく「自他交感の場」という積極的な意味を持っている。Wallonにおいては、表象が成立するには、記号（シニフィアン）以前に自他交感（コミュニケーション）の場の成立が重要なのである。

一方、加藤（2015）は、Wallonが表象に必要な契機として、主体と対象の距離化を問題にしていることに注目する。子どもの初期の思考形態（Piagetのいう自己中心的思考）についてWallon（1928/1996）が行った説明は、次の通りである。「自己中心性とは主体自体と主体の知覚する事物との本質的な混淆であり（…）主体が説明を試みようとする実在から自らを引き離す能力の欠如である（傍点引用者）」。

つまり表象を持たない心的発達初期には、子どもは対象から自分自身を引き離すことができず、つながってしまっているのである。Wallonは表象の発生には分離が必要であると指摘する。この対象から自ら

を引き離す役割を果たすのも姿勢機能である。

「直接経験と事物の表象との間には必然的にある分離 (dissociation) がなければならず、この分離によって、対象に固有の質と固有の存在とが、はじめはそのものと一体となっていた印象や行為から引き離されて (détacher)、対象の基本性質のうちでも外在性という性質が対象に付与されるのである。この分離なくしては表象ということは不可能である。(傍点引用者)」(Wallon, 1949/1965)

外在性が対象に付与されるというように、Wallonにおいては、心的世界はすべてがつながった状態が出发点となる。世界から自らを引き離す主体の行為があつて、はじめて世界は表象される対象となるのだ。「いま、ここ」で対象に直接に働きかける行為(運動機能)とは異なり、主体の内側に一種の溜めを作り、時間的・空間的に対象から主体を引き離し、改めて向き合う行為(姿勢機能)こそが表象発生の条件となるのである。

2. 「二」の成立にまつわるさまざまな発達論

近代科学的な二元論に基づくPiagetの心理学が一世を風靡したのに対して、Wallonの心理学が理解され難かったように、その後の趨勢でも「二」の成立を扱う心理学が主流となることはなかった。しかし「二」の成立にまつわる魅力的な議論は、その後もさまざまな心理学の中で展開されている。そのいくつかを取り上げてみたい。

(1) 自己感の発達論

近年の乳幼児発達研究の礎ともいえるのがSternの自己感の発達論である。小児科医であると同時に精神分析家でもあるSternは、母子の参与観察に基づいて乳幼児の内的世界を仮説的に再構築し、乳児の体験世界を描いた。こうして生まれたSternの自己感の発達論は、「二」以前の体験世界に「二」があらわれてくる様を生き生きと描き出している。特に重要な点は、「自己感」と「他者との関わり」が等置されていることである。Stern (1985/1989) の著作の題名は『乳児の対人世界』であるが、内容は一貫して自己感の質的変容である。自己感という内的な現象が、実際の人との関わり合いとしてあらわれるという構図は、Wallonとも共通している。

自己感とは、直接的で主観的な感覚であり、自我や自己のような反省的な意識の土台となる。それは言葉を獲得する前から存在すると想定されて、新生自己感→中核自己感(中核他者感)→間主観的自己感→言語的自己感の順に発達していく。これらはある時期に特徴的にあらわれるが、次の段階と入れ替わるのではなく、層をなすように発達する。つまり言語的自己感が成立した後も、全ての自己感は常に発動し続けるのである。ここでは、「二」以前の世界に原初の「二」があらわれ、それが生き生きと洗練されていく様をみていこう。

<新生自己感>

新生自己感は、中枢神経系が飛躍的に拡大する生後2ヶ月頃までに形成される自己感で、自分という感覚が生まれつつあるプロセス自体の感覚であるという。本論の文脈で言い換えれば、「二」以前であり、

なおかつ、「二」が生まれつつある感覚ということであろう。乳児は、それが何であるかという客観的な認知に先立ち、その物事にどのように身を揺さぶられるかという主観的な体験として世界をとらえはじめる。Sternが挙げているおしゃぶりをを使った実験の例では、生後3週目の乳児にごつごつした突起のあるおしゃぶりと、なめらかな形のおしゃぶりを吸わせた後に二つを見せると、自分が吸っていたおしゃぶりを見分けることができたという。

乳児には、このような知覚様式の交叉がよくみられる。Sternはこれを「無様式知覚 (amodal perception)」と名づけた。乳児の知覚様式は未だ五感のように分化しておらず、ものごとに全身で共鳴している状態であると考えたのである。様式が定まっていなるとすると、乳児は何を知覚しているのだろうか？ Sternが注目したのは、ごつごつした感じやなめらかな感じといった、ものごとが帯びている「感情の形」であった。Sternはこれを「生气情動 (vitality affect)」と呼ぶ。生气情動は、怒りや喜びなど感情のカテゴリーの違いに関わらず、それが穏やかであるか、激しいか、けだるそうであるかなど、ものごとの活性水準、活性パターン、リズムなどをあらわす。無様式知覚とは、生气情動をあらゆる感覚器官から感じ取る知覚様式であるといえるだろう。新生自己感は、物事に全身で共鳴している生气情動に満たされた世界であり、その後のすべての体験の基底層となるのである。

<中核自己感>

生後2カ月を過ぎる頃から、人と目が合う、社会的微笑が始まるなど、乳児は飛躍的に人間らしい存在になる。身体感覚的な漠然としたまとまりができ、ごく一般的な意味でいう自分という感覚の中核部分ができてくる。

中核自己感は次の4つの基本的な体験によって構成されている。①自己発動性。何らかの動作をする時に、自分が起点になっているという感覚である。②自己一貫性。自分の身体が外界と区別され、断片化せずまとまっている感覚である。③自己情動性。自分の情動体験を自分のものとして感じることである。④自己歴史性。身体感覚的な記憶をもとに、自分という存在が時間的に連続していると感じることである。

また、この時期には自分ではない存在であり、なおかつ、自分にとって大切な誰かがいる感覚、中核他者感も同時に成立する。「人見知り」という現象は、中核他者感の成立という視点からも見ることができる。ある特別な人物と共にいる時の自分という感覚が生まれ、そうでない場合に強烈な違和感を覚えるわけである。

このように中核自己感、自分というまとまり、自分にとって大切な誰かというまとまりができてくる段階、つまり「二」の発生を意味する。Sternはこの段階を画期的な変化であると述べているが、そのきっかけについては明確に言及していない。この点について村上靖彦 (2008, 2009) が「視線触発」という概念を用いて検討している。

視線触発は、視線をはじめとして、触れることや呼びかけなど、他者から向けられるベクトルに気づくことで主体が成立する体験である。働きかけてくる他者に気づくと同時に、働きかけられる自分 (の身体) にも気づくので、視線触発は、対人関係と身体感覚レベルの自己感の発動の契機になると村上氏は述べている。

ここでいう対人関係とは、乳児と養育者の見つめ合いなど、身体を介した情動的な共鳴の段階である。この段階のやり取りは、明確な自我に分かれているわけではないため、未分化な状態と考える立場も多

い。しかし村上（2008）は、自他という形で局在化されていないが、やり取りを生み出す二つの極としては既に分かれているので、この段階は決して未分化なわけではないと強調する。この村上の考え方は、すべてがいっしょくたになった混淆と、自が他に融け込む融即とを区別し、後者を匿名的な二者の関係として記述したWallon（1956/1983）の説とも重なる。自他の分離は自他未分化の状態から一足飛びに生じるのではなく、そのあいだに自他の局在化以前の「二」という段階が想定されているのである。このような匿名的・原初的な「二」の段階は、「二」以前の体験世界を生きるクライアントとの心理療法を考える上で、大変重要な視点となるだろう。

<間主観的自己感>

生後9カ月頃から、また自己感が一足飛びに成長する時期がある。乳児は意図や感情など、こころと呼べるような主観的な体験を持つようになり、言語の獲得に先立って、それらを他者と共有できるようになる。

その一つのあらわれは、共同注意（joint attention）といわれる現象である。乳児は指差しの意味が分かるようになり、差し出された指自体ではなく、その先にある何かに視線を向けることができるようになる。さらに自分でも指差しをすることで意思を伝えたり、関心の共有を求めるようになる。これは、表象機能の前提となる、意味するもの（シニフィアン）と意味されるもの（シニフィエ）の分化が原初的な形で成立したことを意味する。

しかし、それ以上にSternが重視したのは情動状態の共有である。どのように他者の主観的体験の“内部”に入り込み、それを相手と共有するのか。ここでSternが目にしたのが生氣情動である。

「生氣情動を追跡し、調律することによって、私たちはほぼ連続的に相手の内的体験と思われるものを共有し、その結果、他者と“共にある”ことができます。これこそまさに感情的につながれているという体験、(…) 他者と調律し合っているという体験にほかなりません。」（Stern, 1985/1989）

生氣情動は、ここでは世界全体との漠然とした共鳴ではなく、他者との繊細で濃密なやり取りの媒体となる。これが「情動調律（affect attunement）」である。情動調律とは、例えば、乳児が機嫌よく玩具を振り回す動きの強さやテンポに合わせて母親が「オー！オー！」と発声するなど、感じ取った相手の内的状態を知覚様式－交叉的に表現することである。表象機能や共感性への足掛かりとして、模倣が注目されることが多いが、Sternは模倣と情動調律をスペクトラムと捉えた上で、情動調律が模倣のように見たままではないという点を強調する。

「文字通りの模倣が、外部に表れた行動の形式に注意の焦点を当てるのに対し、調律行動は出来事を鑄直し、行動の背後にあるものや共有された感情へと注意の的を移します。つまり、模倣が外的形式を伝える主な方法であるのに対し、調律は内的状態の共有を交し、知らせ合うのに不可欠な方法であるといえます。もっと言えば、模倣は形式を、調律は感情を表すのです。」（Stern, 1985/1989）

乳児は、情動調律を介して、感情状態は他者と共有可能な人間的な体験であるということを認識する。逆に言えば、「調律されたことのない感情状態は、対人間で共有可能な体験の脈絡からは孤立し、隔離

されたものとして体験される」とSternは述べる。これこそがASD児の置かれている状態であると考えられる。

このように乳児は何が起きているのかを知的に認識する前に、それがどのように感じられるかを他者との間で共有することができる。それは情動調律が単なる情緒的交流であるということの意味するわけではない。むしろ、受け止めた相手の主観的状态を自分の中で鑄直して表現するという意味では、情動調律はむしろ象徴化に近い作業でもあるからだ。情動調律は、知的発達と情緒的発達が不可分であることの一つの例証なのである。Sternによれば、情動調律は「間主観性の特別な一型」であるという。客観的世界を構成するのが間主観性である、という意味に照らせば、情動調律とは、言葉にならない身体感覚に近い体験世界を、他者との間で共有することを通して、意味や差異を持つ社会的な文脈につなげていく作業であるといえるだろう。「二」以前の体験世界を生きるクライアントとの心理療法を目指すさまざまな立場が、情動調律をその方法論として用いているのは、このような理由によると考えられる。乳児の体験世界は、共同注意（シニフィアンとシニフィエの分化）と、情動調律（間主観的関わり合い）が成立することで、表象（言葉）の世界へとつながっていくのである。

(2) 間主観性の発達論

間主観性（intersubjectivity）は、相互主体性とも訳されるように、主体同士の相互性、つまり「二」が成立した世界に成り立つものという考え方がある一方で、間身体性のように、「二」以前の体験世界での共有をそこに含める考え方もある。本論にとって重要なのは後者、つまり「二」への分割の動きを内に孕みつつ一体化しているような、動的な概念としての間主観性である。本論ではこれを「原初的な間主観性」と呼ぶこととする。

心理学の領域で、はじめて間主観性という概念を「二」以前の体験世界を記述するために用いたのはTrevarthenであろう。共同注意など、それまで間主観性のはじまりと見なされていた主体間の意識の共有をTrevarthen&Hubley（1978/1989）は「第二次間主観性」と位置づけ、この時期をさらにさかのぼり、未だ主体が成立していない生後2カ月頃の母子間のやり取りを「第一次間主観性」（Trevarthen, 1979/1989）と位置づけた。乳児と養育者は、相手の発する声、表情、動きに惹きつけられ、そのリズムや抑揚に共鳴することで情緒的に交流する。この会話様のやり取りにはまだメッセージ性はなく、そこで起きているのは互いの身体が響き合う情動的な交流である。Trevarthenら（1998/2005）はこれを「原会話」と呼び、情動調律として説明している。

前述したように、情動調律はもともとはStern（1985/1989）の概念である。SternはTrevarthenのいう第二次間主観性の時期になってはじめて間主観的関係性が生まれると考えていたため、情動調律という概念で描写したのは、意味するもの（シニフィアン）と意味されるもの（シニフィエ）の分化が生じはじめる時期のやり取りであった。しかし石谷（2007）が指摘するように、その後の改訂版（Stern, 2000）は、第一次間主観性を認める方向に修正されている。このような情動調律の時期をめぐってずれや揺らぎがあることは、本論にとって重要なことを示唆する。それは情動調律が、第一次間主観性と第二次間主観性のどちらの要素も含んでいるということである。情動調律には、原初的な情動体験の共有（Trevarthen）と、他者の主観的状态を自分の中で鑄直して相手に伝えるという象徴機能の前段階（Stern）の二つの側面があるということである。「二」以前の共鳴の状態から意味や差異をもつ「二」

の世界への移行を担うからこそ、情動調律は「二」の成立過程にとって重要なのであろう。

最新の間主観性研究は、第一次間主観性の世界を「相互交流の二者システム」として論じている (Beebe & Lachmann, 2002/2008; Beebe et al., 2005/2008)。映像技術の革新により、数分の一秒フレームで起きている母子の反応を解析するマイクロ分析が可能となり、そのデータを臨床的に解釈することで、生き生きとした母子のやり取りが、ニュアンスを損なうことなく科学的な検証に耐える素材となる。そこから見えてきたのは、二者の関係ではなく、Wallon (1956/1983) が「ふたつの中心を持った意識」と表現したような、二人の人間がそれぞれ極となって複雑な動きを生み出すひとつの有機体のようなシステム、つまり「二」以前の世界に「二」が生じつつ相互浸透するような動的な状態であった。Beebeらはこれを、乳児と母親それぞれの自己調整と相互交流調制という三つの動きで説明する。肉眼で見ると片方の反応によってもう片方の反応が引き出されているように、つまり素朴な刺激—反応モデルに見えるが、マイクロ分析で見ると、お互いの反応があまりに早すぎて、刺激—反応モデルでは考えられないことがわかる。それではなにが起きているのかということ、相手の反応のパターンと自分の反応のパターンを同期させたり、あえてずらしたりすることでお互いに調整し合っているのである。従来の素朴な考え方では母子間の調整はぴったりと一致しているほどよいとも考えられるが、マイクロ分析の結果、母子間の調整は過度の一致よりも中間程度の一致度をもっとも健康的な予後につながるということがわかった。これは、Winnicottの「ほぼよい母good-enough mother」という概念の科学的検証といってもよいだろう。

現在の心理療法においては、乳児期早期の原初的な間主観性の重要性が認識され、それはASD児をはじめ、大人の精神療法にも有用な視点であると考えられている。また原初的な間主観的関わりは、相互交流調整と自己調整という考え方が示唆するように、つながることだけでなく、適度に閉じることも含んでいる。これは、次項で述べる主体の生成に必要な「結合」と「分離」という二つの契機にもつながる。このようにBeebeらの間主観性研究は、心理療法家の臨床的直観から引き出された理論とも合致するところが多く、大変興味深い。

(3) 主体の成立の段階論

自己感や間主観性の発達論は、こころにおける「二」の成立には「二」の片方の極を担う実在の他者が必要であることを、それぞれの立場から示したものであった。ここでは別の立場から「二」の成立について論じる。

個人のこころの問題を扱う心理療法が誕生したことと、近代的な自我主体が成立したことは密接な関係にある。河合俊雄 (2000) は、主体のあり方という視点から、さまざまな心理学的な症状や問題について論じている。共同体的な意識の中に含まれていた人々が近代的な主体となることは歴史的な事象であるが、個人における主体の確立は、発達の課題としてあらわれるという。近代的な自我主体の確立は、青年期の課題に相当する。しかしそれ以前にも、共同体的な世界に含まれた主客未分化な主体の段階があるという。河合はこれを「神話的主体」と名づけ、それをさらに否定するかたちで近代的な主体が確立するとしている。

「神話的主体が成立してはじめて、ものとのアニミズムの関係ができて、生き生きとした体験や自分の身体に対する実感も生じてくる」と河合が述べているように、神話的主体は、ある意味では世界と一体化したあり方であるが、他方ではすでに世界と有機的な関係を持てるということでもある。自己感や

間主観性の発達論の中で自-他の関係という水平軸で論じられていた「二」の分化過程が、ここでは、主体-土台（世界）の関係という垂直軸で論じられているともいえる。神話的主体は、土台とつながりつつ、そこから立ち上がった動きとしての「二」であり、そこから自らを引き離れた本当の意味での「二」の成立が近代的な主体であるといえるだろう。

河合によれば、神話的主体が成立していない世界は、Blankenburg (1971/1978) が『自明性の喪失』という著書で描いたような、ものごとの背景となる日常性を欠いた状態である。河合は、統合失調症など病理の重い者や、ASDなど主体の確立に問題がある場合は、神話的主体の成立がまず問題になるという。

例えば、ASD児は物や状況など、外界の何か変わらないものにしがみついている。これは一見世界との一体化に見えるが、そこには世界との有機的なつながりはみられない。具体的な物や状況と一体化しているだけで、そもそも土台となる世界が成立していないのである。ASD児のプレイセラピーでは、泥をこねたり、部屋を水浸しにするなど、混沌とした状態を作り出す遊びがしばしば見られる。これは、「主客の融合した、主体の生じてくるための母胎のような世界を一度作りだし（…）その後それが分けられていたり、切られたりする遊びが展開される」（河合, 2000）ことで、神話的主体とその土台となる世界を作り出しているのである。

Giegerich (2009) は、また別の視点から主体のあり方について論じている。Giegerichによれば、人間は文字通りの「生物学的な誕生」を果たしただけでは不十分であり、「心的な誕生」、さらには「心理学的な誕生」の三つのレベルの誕生がある。生まれたばかりの新生児は、生物学的にはこの世に生み出された個体であるが、未だ心的な存在としては誕生していない。心的な存在としての最も原初的な形は、関係という概念を生きることであり、それには誰か具体的な人物のもとに自分自身をつなぎ止める必要がある。具体的な人物の心理学的な保護に包まれることで、子どもは心的に誕生する。これは逆説的に心理学的な繭に包まれることを意味する。心理学的な主体として本当に生まれるには、繭を出て自分自身が自分の受け皿にならなければならない。

河合の主体論とGiegerichの三つの誕生説は同じ概念を扱っているわけではないため、「神話的主体（河合）」と「心的誕生（Giegerich）」を単純に重ね合わせることはできないが、どちらも未だ世界に包まれつつ、特別な誰かを定点として世界と関わりを持つ形で原初的な「二」が成立しつつある状態であると考えられる。ASDなど、発達に問題を抱えているクライアントについて考える際、本来の意味での主体の成立以前に、もう一段階、原初的で根源的な主体の段階、世界と生き生きとした関係を取り結ぶような段階が想定されていることは重要である。ASDの心理療法においては、神話的主体や心的誕生などの中間段階が問題になると思われるからだ。

(4) 移行対象と移行現象

最後に、別の観点からここにおける「二」の成立過程を扱っている概念として、Winnicott (1971/1979) の「移行現象」を取り上げたい。Winnicottは、幼児がお気に入りのぬいぐるみやタオルなどを肌身離さず持ち歩くことを、「母親と融合している状態から、母親の外部にあり独立したものとして存在する状態」への移行現象であると考え、この時に使用しているぬいぐるみなどを移行対象と呼んだ。子どもは、自分ではない対象物を自分の一部であるかのように使いながら、自己と他者、意識と無意識、現実

と幻想など矛盾しつつ重なり合う「二」の間（あわい）を体験する。移行現象は、いわば「二」以前の世界から「二」への移行の過程を記述した概念である。移行現象は、子どもの発達過程にのみ見られる現象というわけではなく、移行対象の使用から、「遊ぶこと」へ、そして人間のあらゆる創造的な活動へと発展するとWinnicottは述べている。この「創造的な活動」には心理療法も含まれる。心理療法であり遊ぶことそのものでもあるプレイセラピーは、移行現象が起きる場という意味でも、未分化な体験世界を生きている子どものところに「二」の成立を促す有効なアプローチであるといえるだろう。

おわりに

Wallonの心理学から始まり、自己感の発達論、間主観性の発達論、主体の発達論を概観することで、子どもの心的世界を「二」以前の体験世界として論じるさまざまな視点を得た。特に興味深いと思われるのは、自他の分離は未分化な状態から一足飛びに生じるわけではないという点である。「二」の成立を扱うさまざまな心理学には、共通して、「二」とも「一」ともいえない揺らぎのような段階が想定されていた。そして、それは具体的な他者とのやり取りを介して生き生きと体験されていたのである。

Hobson (1993/2000) によれば、人は生得的に人との交流を求めるようプログラムされているが、ASD児は何らかの要因により、それが発動しない。人を人として体験できない、「二」が生じないのである。そうであるならば、まずは「二」とも「一」ともいえない揺らぎのような原初的な「二」が彼らの体験世界に生じること、そしてそれを治療関係の中で生きることが、ASD児との心理療法の鍵となるだろう。この点については稿を改めて論じたい。

<文献>

- Beebe,B.&Lachmann,F. (2002). *Infant Research and Adult Treatment: Co-constructing Interactions*. The Analytic Press. 富樫公一監訳 (2008) : 乳児研究と成人の精神分析—共構築され続ける相互交流の理論— 誠信書房
- Beebe,B., Knoblauch,S., Rustin,J., and Sorter,D. (2005). *Forms of Intersubjectivity in Infant Research and Adult Treatment*. Other Press. London. 丸田俊彦監訳 (2008) : 乳児研究から大人の精神療法へ—間主観性さまざま— 岩崎学術出版社
- Blankenburg,W. (1971). *Der Verlust der natürlichen Selbstverständlichkeit*, Enke. 木村敏他訳 (1978) : 自明性の喪失, みすず書房
- Giegerich,W. (2009). "Irrelevantification" or : On the Death of Nature, the Construction of "the Archetype", and the Birth of Man. *Collected English Papers of Wolfgang Giegerich*, Vol.4,387-442, New Orleans: Spring Journal.
- 浜田寿美男 訳編 (1983). *ワロン／身体・自我・社会* ミネルヴァ書房
- 浜田寿美男 (1994). *ピアジェとワロン—個的発想と類的発想—* ミネルヴァ書房
- Hobson,R.P. (1993). *Autism and the development of mind*; Psychology Press, 木村孝司 (監訳) (2000), 自閉症と心の発達—「心の理論」を越えて—, 学苑社.
- 石谷真一 (2007). 自己と関係性の発達臨床心理学—乳幼児発達研究の知見を臨床に生かす, 培風館.

- 加藤義信・日下正一・足立自朗・亀谷和史（編著訳）（1996）. ピアジェ×ワロン論争—発達するとはどういうことか ミネルヴァ書房
- 加藤義信（2015）. アンリ・ワロン—その生涯と発達思想 福村出版
- 河合俊雄（2000）. 心理臨床の理論, 岩波書店.
- 小林隆児（2000）. 自閉症の関係障害臨床—母と子のあいだを治療する, ミネルヴァ書房.
- 村上靖彦（2008）. 自閉症の現象学, 勁草書房.
- 村上靖彦（2009）. 自閉症における自己の発見と発達 宮尾益知（監修）アスペルガー症候群—治療の現場から— 出版館ブック・クラブ pp27-42.
- Piaget,J.,et.al. (1928). Les trois systems de la pensée de l'enfant, *Bulletin de la Société française du Philosophie*, 28, pp97-141. 加藤他編訳（1996）. ピアジェ×ワロン論争—発達するとはどういうことか ミネルヴァ書房 pp18-47.
- Piaget,J. (1951). Pensée égocentrique et pensée sociocentrique. Cahiers Internationaux de Sociologie. Vol.10, 加藤他編訳（1996）：ピアジェ×ワロン論争—発達するとはどういうことか ミネルヴァ書房 pp109-124.
- Stern,D.N. (1985). *The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology* ; 小此木啓吾・丸田俊彦（監訳）(1989), 乳児の対人世界. 岩波学術出版社.
- 田中康裕（2013）. 現代におけるユビキタスな自己意識—サイコロジカル・インフラの消失と発達障害 河合俊雄・田中康裕（編） 大人の発達障害の見立てと心理療法 創元社 pp202-217.
- 田中康裕（2017）. 心理療法の未来—その自己展開と終焉について 創元社
- Trevarthen,C.; Hublely,P. (1978). Secondary intersubjectivity: confidence, confiding and acts of meaning in the first year, *The Emergence of Language*, Academic Press.; 鯨岡峻（編訳著）(1989), 第2次相互主体性の成り立ち, 母と子のあいだ—初期コミュニケーションの発達, ミネルヴァ書房.
- Trevarthen,C. (1979). Communication and cooperation in early infancy: a description of primary intersubjectivity, *Before Speech*, Cambridge University Press.; 鯨岡峻（編訳著）(1989), 早期乳児期における母子間のコミュニケーションと協応—第1次相互主体性について, 母と子のあいだ—初期コミュニケーションの発達, ミネルヴァ書房.
- Trevarthen,C.; Aitken,K.; Papoudi,D.; Robarts,J. (1998). *Children with Autism—Diagnosis and interventions to Meet Their Needs—*. Jessica Kingsley Publishers. London ; 中野茂・伊藤良子・近藤清美（監訳）（2005）, 自閉症の子どもたち—間主観性の発達心理学からのアプローチ, ミネルヴァ書房.
- Wallon,H. (1928). ピアジェの報告に対するワロンのコメント In :Piaget,J.,et.al. : (1928) Les trois systems de la pensée de l'enfant, *Bulletin de la Société française du Philosophie*, 28, pp97-141. 加藤他編訳（1996）：ピアジェ×ワロン論争—発達するとはどういうことか ミネルヴァ書房 pp18-47.
- Wallon,H. (1938). Rappports affectifs : les émotions. La vie mentale. Vol,VIII de *《L'encyclopédie Française》* 浜田寿美男訳編（1983）：情意的関係—情動について ワロン／身体・自我・社会, ミネルヴァ書房 pp149-182.
- Wallon,H. (1942). *De l'acte à la pensée :Essai de psychologie comparée*. Paris : Flammarion. 滝沢武久（訳）（1962）：認識過程の心理学 大月書店

- Wallon,H. (1946). Le rôle de 《l'autre》 dans la conscience du 《moi》. *J.Egypt.Psychol.* 浜田寿美男訳編 (1983) : 『自我』意識のなかで『他者』はどのような役割をはたしているか ワロン/身体・自我・社会, ミネルヴァ書房 pp.52-72.
- Wallon,H. (1947). L'étude psychologique et sociologique de l'enfant. *Cahiers Internationaux de Sociologie*, vol.3, 加藤他編訳 (1996) : ピアジェ×ワロン論争—発達するとはどういうことか ミネルヴァ書房 pp80-99.
- Wallon,H. (1954). Kinesthésie et image visuelle du corps propre chez l'enfant. *Bulletin de Psychologie*, tomo VII, 浜田寿美男訳編 (1983) : 子どもにおける自己身体の運動感覚と視覚像, ワロン/身体・自我・社会, ミネルヴァ書房. pp.183-207.
- Wallon,H. (1956). Niveaux et fluctuations du moi, *L'Evolution psychiatrique. I*. 浜田寿美男訳編 (1983) : 自我の水準とその変動, ワロン/身体・自我・社会, ミネルヴァ書房. pp.23-51.
- Winnicott,D.W. (1971). *Playing and Reality*, London: Tavistock Publication. 橋本雅雄 (訳)(1979). 遊ぶことと現実 岩波学術出版社

